

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Epidemiology and Clinical Characteristics Based on the Rome III and IV Criteria of Japanese Patients with Functional Dyspepsia

(日本人における Rome III, IV 基準を用いた機能性ディスぺプシア患者の疫学研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

消化管疾患学 (指導教授 福井 広一)

氏 名

青野 颯太

【背景】機能性ディスぺプシア (Functional dyspepsia: FD) とは器質的疾患がないにもかかわらず、胃もたれ・心窩部痛などの上腹部症状が慢性的に続いている疾患である。FD の診断には Rome 基準が用いられているが、Rome IV 基準では食後に上腹部症状が起こる場合の全ての患者を PDS に分類すると定義されているため、実地臨床現場で Rome III、IV 基準のどちらの基準を用いるかで FD の病型が異なるという事態が生じる。現在までに日本人における上腹部症状を訴える患者で、Rome III、IV 基準を同時に用いて病型分類や、その割合、臨床的特徴を検討した報告はない。

【目的】本研究は、FD 患者を対象に Rome III、IV 基準の 2 つの基準を同時に用いて、その診断能を調査し、消化器症状、健康関連 QOL、不安や抑うつなどの心理的因子に与える影響を明らかにすることである。

【対象と方法】兵庫医科大学病院および 8 施設の関連病院において、上腹部症状を訴えて病院を受診し、上部消化管内視鏡検査等で器質的疾患を除外された FD 患者に対して、消化器症状や健康関連 QOL、心理的因子に関する自己記入式アンケート調査を実施した。消化器症状は日本語版 Rome 問診票、GSRS (Gastrointestinal Symptom Rating Score)、健康関連 QOL は SF-8、抑うつや不安症状は HADS score (hospital anxiety and depression scale)、STAI (State-Trait Anxiety Inventory) で評価した。

【結果】アンケートを取得し得た *H. pylori* 陽性の患者 5 名を除く 205 名を解析対象とした。解析症例中、54.1% (111 名) が FD 患者であった。Rome III 基準における FD 患者の割合は、EPS が 19% (21 名)、PDS が 38% (42 名)、EPS と PDS の overlap が 43% (48 名) であったが、Rome IV 基準では食後に上腹部症状が起こる患者が全て PDS に分類されることで overlap が 17% (19 名) に減少し、PDS が 64% (71 名) に増加した。Rome III 基準から Rome IV 基準で overlap から PDS に病型が変わった患者は、Rome III 基準と Rome IV 基準ともに PDS で病型が変わらなかった患者と比較して、早期満腹感が有意に少なく、酸逆流スコアと腹痛スコアが有意に高い結果であり、食後の酸逆流による EPS 症状が強く出現している可能性が考えられた。

【結語】Rome III 基準から Rome IV 基準に変わることによって、overlap 患者が減少し、PDS 患者が増加しており、より明確に PDS と EPS の分類分けが可能であった。Rome III 基準から Rome IV 基準で overlap から PDS に病型が変わった患者では、食後の EPS 症状、特に酸逆流症状が強い病態の存在が示唆されたことから、このような患者群では消化管運動改善薬よりもむしろ、酸分泌抑制薬を使用する方が好ましい可能性が示唆された。